

お袈裟はインドから伝わったもので、正式な仏教徒として僧侶が身に着けるものです。

宗派によってさまざまな形式がありますが、曹洞宗の場合、五条衣・七条衣・九条衣などがあります。五条衣は絡子(らくす)とも呼ばれ、僧侶が外出時などにかけるものです、七条衣は坐禅を修行する時や広く法要を行う時に、そして九条衣は、仏法を説く法話をほうわ行う時、また法要の中心となる僧侶がかけるものです。

お袈裟の素材は、絹や綿、麻などが多いのですが、元々、仏教が生まれた頃のインドでは、捨てられて使われなくなった布を拾い集め、それらを縫い合わせて作った、糞掃衣(ふんぞうえ)という衣ころもを、お釈迦さまと弟子たちが着ていました。

捨てられていた布を集めて作った物ですから、麻や綿、絹といったさまざまな素材から出来ていました。それを黒や紺・カーキ色などのくすんだ色に染めて、体に巻き付けて衣服としていたのです。人々が使えなくなった布を集めて自分たちの衣服にするという、ものを大切に作る仏教徒ならではのものでした。

さて、伝える衣と書いて伝衣(でんえ)というものがあります。それは、師匠ししょうから弟子へ、お釈迦さまの正しい教えが伝わることの証として、お袈裟を伝えることです。この伝衣は、お釈迦さまから代々引き継がれ、達磨大師だるまから中国へ伝わり、そして曹洞宗では道元禅師が中国から日本へ伝えられたのです。師匠から弟子へお袈裟を伝えるということは、お釈迦さまのお姿や大切な教えを伝えることの象徴として、代々大事にされてきたのです。

お袈裟をかける時は、まずお袈裟を両手で持ち、額のところで一度念ねんじてから頭の上へのせ、合掌して次のような言葉を唱えます。

「偉大なる解脱げだつの服、如来にょらいの衣ころも。このお釈迦さまの教えを身につけ奉たてまつり、  
広く多くの人々をお釈迦さまの教えによって救おう……。」

お袈裟を身につけるかぎりは、いつでもこの誓いを心に持たなければならないと、道元禅師どうげんは著書『正法眼蔵しょうぼうげんぞう』の中で示されております。

このような思いを持ち、僧侶はお袈裟を身につけるのです。